

## 大拙先生の人と学問

谷川徹三

十余年前、もちろん先生の生前であるが、私は読売新聞社の需めに応じて、大拙先生について短文を草したことがある。

大拙先生は梵文楞伽經の研究を出したり、敦煌出土の六祖壇經や荷沢神會語録の校訂をしたりしている学者である。しかし二十一歳にして今北洪川の門に参じ、二十五歳の時には釈宗演のもとに見性した禅者である。が禅者であり禅の研究者であると共に、石見の才市や讃岐の庄松のような浄土門の妙好人の宗教的体験の深さに合掌している人でもある。

大拙先生は靈性的自覚という。靈性的自覚には学問や知恵才覚は何の役にも立たぬ。その間の消息は、先生があらゆる著書の中に説いて倦まぬところである。先生が学者であって少しも学者臭くないのは、その自ら説くところを体現しているからであろう。

羅漢顔という顔は近頃滅多に見なくなったが、その滅多に見なくなった羅漢顔を私は大拙先生の中に見る。この現代において珍重すべき顔は、単に外貌についていうだけではない。物の本によると、阿羅漢とは一切の煩惱を断じつくして究極の知恵を得、世人の供養を受けるにふさわしい聖者をいうとある。大拙

先生はまさしくそういう存在である。

私は、今度日本へ帰られてからまだ大拙先生に会っていない。というより随分長く会っていない。この前日本へ帰られた時、どうも日本の政治が心配だ、誰か政治家に会って話したいという言葉を洩らされていたが、そのうち、緒方竹虎に会うから君も一緒に来んかという。築地のどこかで、緒方さんには参議院の大谷贇雄氏がついていて、一夕四人で食事を共にしながら話をした。もちろん私はほとんど黙って聴いていたのだが、その時の大拙先生の気合の鋭さは今も私の胸に刻まれている。緒方さんがなくなる少し前で、緒方さんが終始暗い表情をしていたのは、肉体的にも弱っていたからであろうが、大拙先生のたのみかけるような鋭い質問にたじろいでいたところもあったようだ。

人間年をとると、どんな豪傑でも眼光がおとろえる。私の知っている豪傑も、八十を越したらやはり大分眼がしょぼついてきた。齢は争われないものである。ところが大拙先生は、九十になっても眼光におとろえを見せないのである。

これはよほどの精神力によるものであろう。先生こそ真の自由人である。いわゆる自由人ではない、自由を超越した自由人である。その無類の風格の中に私はいつも、応無所住而生其心というあの言葉の体現者を見る思いをする。

そういう先生について、しかし、もう一つ私には忘れることのできない思い出がある。昭和二十年六月、西田幾多郎先生の葬送の日である。やがて遺骸が焼場へ運ばれるという前、その「心友」に最後の別れをして来られた先生は、縁側のところへ赤い眼をしてもどりながら、そこにいた私を見るときもなく見て、つぶやくように「どうもいかん、どうもいかん」と言ってハンカチで眼をぬぐわれた。

先生が若くして釈宗演のもとに見性した禅者であり、また禅思想について幾多の名著を遺した禅学者であ

りながら、石見の才市や讃岐の庄松の如き浄土門の妙好人の宗教的体験の深さに合掌する人でもあったのは、禪の究局と念仏の究局との間に相通うものを見たからである。この間の消息については、『禪と念仏の心理学的基礎』の中にその解明を見出すことができる。この書は英文の *Essays in Zen Buddhism* (1933, London) 第二巻の一部をなす *The Koan Exercise of Part I & Part II* とを、当時の大谷大学教授横川顯正氏が邦訳し、それに先生が手を加えたものであるが、その中に先生の独自の見解が示されているのだ。

皮相的に見ると、念仏は禪と全く正反対である。禪が自己以外の何ものにも依拠しないのに反して、念仏はもっぱら仏にその信賴をかける。しかし浄土門の知識たちが、南無阿弥陀仏の形における称名念仏を最も本質的な宗教的行為であるとしたには、その宗教的経験に基づいた心理的省察があったとみるべきで、そこに禪における公案の提擲に対応する何かがある。その心理的共通素地のあったがために、禪は念仏に、念仏は禪にと、相互に接近するを得たのである。

念仏の目的は、仏典や論疏からも明らかに知られるように幾度もの変改を受けている。初めは仏陀の弟子たちが、仏陀自身まだ生きていたという思いを抱きたいところから、生前の仏陀を憶念することであった。これは人間的な自然の欲求である。それが後世になると、永遠に極楽浄土に住して、完全に理想化された仏陀を見ることを意味するようになり、竟には、ほとんど機械的に称名念仏することを意味するに至った。

しかもその南無阿弥陀仏は、その本来の梵語の形を、その音訳のままに留保して来たのである。中国でも日本でも、それがどうしてそれぞれの国の言葉に訳し代えられないで、真言陀羅尼のように扱われて来たのか。そしてただ、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと称えることが勧められて来たのか。それを名号自体の中に包まれている呪術的效果に求むべきことを説く者もあるけれど、そうではなく、それを名号の反復からおのずから生まれて来る心理的效果に求むべきだ、というのが先生の基本的見解なのである。

何か解しうべき意味の存する間は、その意味にまつわる観念や感情の無限の連続がそこに生ずる。そうな

れば、心は論理の組み立てに従事するか、または想像と連想の網細工に没入して、收拾できなくなる。これに反して、無意味な音がただ反復される時は、心はそこにとどまって、脇道にさまよい出る折をもたぬことになる。つまり、心像や幻覚の類が意識界に侵入する可能性を減ずるのである。そこに念仏の機械化のもたらず心理的意味がある。念仏三昧の中に、禅の悟境たる無心を見ることができなのだ。

この無心を先生は常に説かれた。先生の自由人としての無類の風格は——自由人という言葉は西洋起源ではもともと宗教の否定者に使われ、今でもその名残は残っているけれど、東洋では仏教で、殊に禅の方で、宗教的境地を示す言葉として、自在という言葉と併せ用いられているから、敢てこの言葉を使うが、その自由人としての無類の風格は、この無心に由来するのである。

先生がなくなられた時、追憶の文に書いたことだけれど、それより数年前、辻雙明氏の主宰する「不二禅堂」が出来て、その祝賀の式のあった日である。後援者の財界人たちがたくさん居ながれている席で、先生は最初に祝辞を述べられた。畳敷きの大広間なので、そこに坐っていた先生は、やはり何と云っても齢だから、立ちあがるのに一苦労だったのだろう。「どっこいしょ」と言ってお立ちあがったのはいいが、その「どっこいしょ」が室中に響き渡るほどの声になったのである。私は驚いたものの、それは、いかにも自然な無心の声で、思わず微笑の頬にのぼるのを禁じえなかった。同時に、何とも言えぬ嬉しい気持ちになって、その日は一日好い機嫌でいられた。

もう一つ、最後に先生に会った折のことも忘れられない。先生逝去の前年の秋、サー・ハーバート・リードが出光佐三氏の招きで日本へやって来た。出光氏がその蒐蔵の仙厓の書画の展覧をヨーロッパ各地で催した際、その図録にリードが仙厓についての一文を寄せた縁によるものである。そのリードを主賓とした出光氏の招宴に私も招かれ、久しぶりで先生に会った。と言っても百人に近い客たちが、数人ずつそれぞれ中国料理の卓を囲んだその宴では、主賓と同座の先生から少し離れた卓に私はいたので、卓についてから初めて

私を認められたらしく、私はその年の春から夏にかけて丸二か月の入院生活の後、そのまま蓄えた顎鬚を指さすように黙って自分の顎を撫でながら、眼と口とで私に笑いかけて来られたのだ。その私の鬚をひやかしているのである。それが九十五翁の先生なのだ。

しかしこの宗教的自由人は時局や政治についても決して無関心ではなかった。それどころか国を憂える精神において何びとにもひけをとらなかつたこと、私がさきに言ったごとくである。その先生の心情と気概とは、戦後間もなく文庫本として出された『自主的に考へる』や『青年に与ふ』に最もよく示されている。現代に大きな力をもった思想やイデオロギーについても、先生は独自の立場に立って言及している。

特に私の注意を惹くものに共産主義についての言及がある。共産主義の中には、弱者に対する愛憫の情と、権力者に対する憎悪と、その裏にある権力慾という三つの感情の心理的錯綜がある。「共産主義は社会主義として何れの国民の間にも行われ得るもの、又或る場合には行うて大いに利益あるものと信ぜられる」。が、「全体主義的画一性の政治」になり易く、そうすると「集団生活はその流動性を失却」して、「個人的多様性」が否定せられる。元来「集団生活はそのものとしては意義がない」。その構成分子たる個人がそれぞれ自己を実現するところに、本位が置かれねばならない。その意味で「個多と全一の相互扶助」がなければならぬ。これが先生の見解で、こうして先生はガンジーやシュバイツァーを讚美している。ここにもまた宗教的自由人たる先生の面目がある。

先生の書は、そういう先生を端的に表現している。